

Fons



写真:萩庭 隆さん(下河合町)

幸久橋の思い出

萩谷 浩司

幸久橋は太田の玄関口のように久慈川にかかっている、地元の人にとって誇らしい橋でした。橋の距離は短いですが、そこに差し掛かると太田から外の世界に行くのを実感しました。高校を卒業して地元を離れたときは橋を渡っているときに「ああ、いよいよ太田ともお別れだ」と思ったものです。また、遠くに出かけていて帰宅するとき額田からの坂を下り橋の上まで来ると「ああ、太田に帰ってきたな」と思うのでした。

幸久大橋ができた後も取り壊されず地元でも主要な道路として活躍していました。が、たびたび起こる地震で通行止めになることも多くなりました。そして東日本大震災。いよいよもう通れなくなると覚悟しましたが、数か月後に通行再開されそこに橋があるありがたみを感じたのです。しかしその日は突然おとずれたのです。平成二十五年十月に全面通行止めになったのを最後にその役目を終えたのでした。

昨年、幸久大橋は四車線になり朝夕の渋滞も随分解消されました。額田から太田に入る眺めも遠く日立や東海方面まで見え随分変わりました。しかし橋を渡る時、故郷を思う人たちの気持ちは変わらないのではないのでしょうか。四月になり今年も多くの方の想いを橋が繋いでいくでしょう。

特集 幸久の橋ものがたり

塩原慶子、萩谷浩司

常陸太田は古くから交通の要衝であり、常陸太田以北からの物資集積地として栄えました。人の交流や物資の流通を支える道や地域を分断する川を渡る橋は、日本中で流通の要としての役割を果たしてきましたが、久慈川にかかる「幸久橋」も、同じように常陸太田の発展を下支えた大切なインフラであり、地域の思い出の場所として親しまれてきました。

市外から、常陸太田に戻るとき、額田を経由し幸久橋に至る風景は、多くの常陸太田市民にとって「ふるさとへ帰ってきた」と思わせる思い出深い景色であると思います。幸久大橋の完成に伴い幸久橋はその役割を終えました。長い間常陸太田の発展に寄与してきた橋の風景をご覧いただくとともに、幸久橋に「お疲れ様でした」の思いを届けたいと思います。また、新しく地域の足を支える幸久大橋の雄姿も併せてご紹介します。新しい時代へ、地域の思い出も橋渡ししてくれることでしょう。

掲載の写真はすべて下河合町・萩庭隆さん 撮影



思い出話し①

昔はよく橋の下で遊んだものでした。泳いだり、橋の下の穴をくぐったり、橋を支えているコンクリートの上から飛び込んだり…。何度も溺れそうになった事もある。昔は足がつかなくて危険な所でも平気で遊んでた。釣りも良くしたもんだよ。フナ、ハゼ、ボラなんかをとれた。学校で写生会というところの場所ですよね。



思い出話し②

昔の橋なので、幅が結構狭かったんですよね。免許取りたての頃は、対向車線に大型の車が向かってくるのが見えると、自然とハンドルを握る手に力が入って、ハンドルを小さく左右に振ってしまいがちになるんですね。すれ違う瞬間はドキドキで、あ！っと左に少しハンドルを回してしまったら、左側をこすってしまったって…。後から通るときによく見ると、橋のコンクリに車をこすった跡が、たくさんついていて、結構大勢こすっちゃったんだらうな、って懐かしい思い出です。



幸久大橋にたくす

幸久大橋二車線開通から九年後、二〇一八年、四車線化が実現しました。工事の様子を詳細に地元の萩庭隆さんが撮影されていました。「大橋」の名の通り壮大な橋の誕生です。那珂市から常陸太田に入る橋はゆるいカーブで導かれ、常陸太田の風景を特徴づける大理石の白い山肌が視界に飛び込んでくると同時に常陸太田の風景が現れます。そのダイナミックな登場風景はより一層常陸太田への入り口を印象付けるものではないでしょうか。新しい橋の誕生を幸久橋へのお疲れ様と共に喜びたいと思います。

クレーンの先に見える数字は、くい打ちの深さを示す数値です。地中三十五メートル近くまでしっかりと土台が築かれています。



開通式の車列。



大雪の中の幸久大橋。



地元の小学生が完成した橋の風景を見学しました。



写真の奥行きにも壮大な橋の雄姿がみえます。

特集 縁の下の力もち！

国体を支え・盛り上げる人たち

塩原慶子、萩谷浩司、鴨志田弘子、黒羽文男

今年の秋、茨城県で国体が開かれます。約五十年ぶりの開催に、準備が着々と進んでいます。晴れの舞台で活躍する選手たちへの応援はもちろんですが、今回はその晴れ舞台を陰で支える・盛り上げる人たちをご紹介します。

山吹運動公園や白羽スポーツ広場の整備担当、スポーツ振興課体育施設管理事務所の森さん、黒羽さんにお話を伺いました。

グラウンドを「いい状態」に保つとは？

自然が相手なので、大会のある期間だけに神経を集中するのではなく、いつも選手の皆さんが使いやすい状態で使っていただけのように、毎日の積み重ねが大事です。グラウンドの整備というと地面を注意深く見ているように思われるかもしれませんが、一番気になるのは天気です。グラウンドは水はけが大事なので全体に傾斜がついてありますが、そのために雨が降れば水の流れるわだちができてしまいます。大会が近くなると、雨が降るか、どのくらい降るか、がとても心配になります。昨年のプレ大会のときも、初日が雨でした。砂をいれてぬかるみを補修するなどしましたが、利用前に整備終わるよう、早め早めを心掛けました。

野球とソフトボール

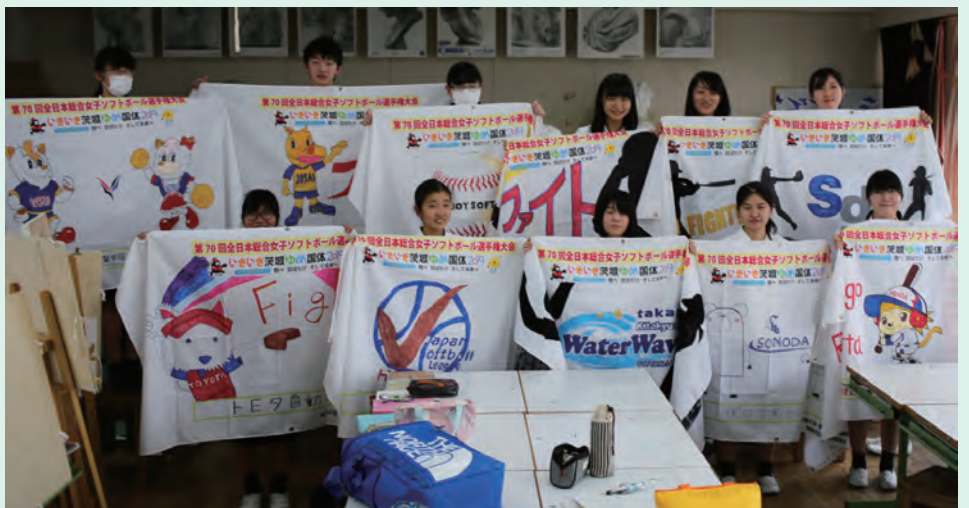
野球とソフトボールでは、マウンドの位置が全く違います。テレビなどでソフトボールの試合

などを見ますが、試合や選手ではなく、グラウンドがどうなってるんだろうとか、マウンドはどう仕上げてるんだろうなどについて目がいつてしまいます。スポーツを見る目が変わってしまいました。もう、癖になっていきますね、気になるのはグラウンドばかり。

雑草との闘い

芝生に雑草が入ってしまうのが一番厄介です。特にクローバー。見つけたら除去します。グラウンドを掘ってクローバーの根を確認したことがあるのですが、小さな芽であっても、地中の根はとても広い範囲に広がっていました。「雑草との戦い」という言葉がぴったりなくらい、大変な作業です。

市民の皆さんが、使いやすいグラウンドを目指して、グラウンドの整備は日々、一日も休むことなく進められています。



ウエルカムメッセージをみんなで！

日本各地から、国体の選手一行をお迎えする会場の飾りつけに、常陸太田の子どもたちが一役買っています。市内の三つの高校では、美術部の皆さんが応援旗を作り、小学校・中学校では、クラスでグループに分かれ応援のぼりを作成しました。

のぼりは応援する県を選び、その県の特徴を調べてイラストに起こしてあります。色とりどりで、個性豊かな日本中の県の特徴を見事に描き出したのぼりが完成しました。沿道や開催会場でひるがえる応援旗のぼりにもぜひ目を止めてじっくりご覧ください。

人口減少・少子化問題が進む中、地方の活性化を高めようと頑張っている常陸太田市のスポーツクラブを紹介いたします。

二〇一四年に安宗治コーチ指導のもとに、子どもから大人まで卓球を高めようとはじまったのがクラブのはじまりです。代表の安宗治さんは、学生時代から卓球の経験もあり、地域の子どもたちに卓球の良さを楽しんで、もっと知ってもらいたいと思い前向きに指導をおこなっていたところ、五年前に卓球を通じて、武子勝徳さんとの出会いがあり、それがきっかけで設立しました。私の子どもも、安宗治さんに卓球のご指導をうけていました。

スポーツクラブは、地域に根ざし青少年の育成を通じて、社会に貢献していく重要な役割と責任を担っています。その活動を社会的に認識してもらい、まず多くの人たちに自分たちがどのようなスポーツクラブなのかを知ってもらう必要があります。そのために重要になってくるのが地域密着、地域貢献としてのスポーツ活動です。多くの人たちの理解協



設立/2014年 会員数/高校生6名、中学生4名、小学生1名
練習日/高校生:月・木・日曜日(2時間)
中学生・小学生:月・日曜日(2時間)
問い合わせ/代表:安宗治 090-1037-3397
武子勝徳 090-8495-8162

力を得るために自分たちのスポーツクラブの目指す方向性や活動状況を、いろいろな方法を用いて伝えていくのが大切かと思っています。



文化の泉

常陸太田の
黄門様検定会

黒羽 文男 (取材)

水戸黄門は、テレビドラマで良く知られていますが、黄門様こと徳川光圀公が隠居した西山荘の所在地を知る人は、全国的に見ても少ない事が現実です。光圀公をもっと知っていただきたく、「常陸太田の黄門様検定会」が平成二十年に創立されました。活動は、一般市民を通して光圀公が残した功績と人となりを探り、遺徳を後世に伝承してもらう事が目的です。

西山荘義公塾は、日乗上人日記や寿蔵碑の内容を参考に、光圀公が西山荘へ隠居して亡くなるまで様々な生活ぶりを紹介しています。

また、光圀公が食していた当時の味を再現し、楽しんでいただく事業として、「別春会」や「汁講」を開催しています。

講演活動では、光圀公の生い立ちや青年期、第二代水戸藩主になった経緯や、なぜ西山荘を現在の常陸太田市に決めたのか等を、エピソードを交え紹介しています。会長の石川誠さんは、自らも黄門様になりきろうと白いひげを蓄え、常陸太田の黄門様になりきっています。

常陸太田の黄門様検定会では会員を随時募集しています。黄門様の事を勉強したい方や黄門様をもっと知りたいという方は大歓迎です。



人員構成/36名 活動日/毎月一回(運営委員会)
活動費/年会費1,000円
連絡先/代表:石川 誠 0294-72-1093
常陸太田市教育委員会文化課 0294-72-3201

常陸太田の地名話

30

花房 『常陸太田市花房町』

川松 博

南北朝時代からみえる地名。『美濃国諸家系図』『百家系図』(鈴木真年翁編)より

花房は、もとは瀨瀨と書いた。瀨瀨は音読みで「こうけつ」と読む。もとは「くくり」とか「はなぶさ」とか読まれ、後にそれが花房に変わったと記されている。

「くくり」という地名が美濃国の麻などの古代衣服に関係する氏族の分布地に存在することから、美濃にいた衣服関係の氏族の後裔が、この地に遷住して伝えた地名と考えられる。

『那珂町史』によると、三野前国造の同族倭文連が久慈郡で静織を製作したので、久慈郡静織里に静神社を祀ることが伝えられている。この倭文連の後裔の居住地がこの花房だったと思われる。花房氏を名のり、江戸氏の家臣であったと記されている。



花房城があった花房山

<参考文献>
「新編常陸国誌」「茨城県地名大辞典」
「美濃国諸家系図」「百家系図」
「那珂町史」「金砂郷村史」



思い出の絵本

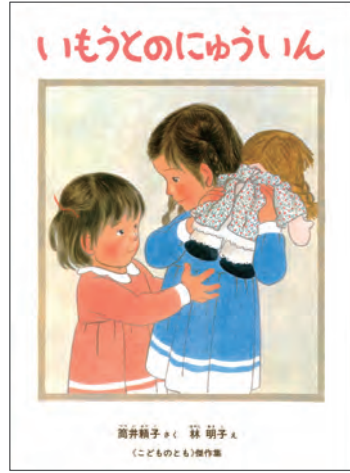
『いもうとのにゆういん』 桑原真由美（大里町）

私がこの絵本に出会ったのは、長女が保育園に通っている時でした。ちょうどこの頃、二人目をおなかに授かっていたので、妹との出会いを待ちわびながら、何度も一緒に読んだことを思い出します。

この「いもうとのにゆういん」は、あさえが幼稚園から帰ってくる時、お母さんはぐったりとした妹のあやちゃんを病院に連れていくところからはじまります。友達と遊びながら待っていると、お母さんが帰ってきて、あやちゃんが盲腸の手術で入院することになったといえます。あさえはお父さんが帰ってくるまで、一人で留守番をします。そのうち暗くなって、雷が鳴り、あさえはベッドにもぐりこみ、今にも押しつぶされそうな不安を抱えながら、ほっぺこちゃんを抱きしめます。次の日、お見舞いに行つて妹にあげたのは、祈りのこもった折紙と手紙。そして、大切にしていたほっぺこちゃん。お母さんにほめられたあさえは、うれしそうにはにかみます……。

大事なお人形のほっぺこちゃんを、妹にプレゼントする場面は、毎回うるつと涙してしまふ私です。我が家の三人の娘達もこの絵本が大好きで、それぞれに自分を重ね合わせて心に温かいものを感じていたようです。

自分のぬいぐるみを紙に包んで妹にあげたり、ねている妹の枕元に、お人形をそつと忍ばせたり……。当時のかわいい姿を思い出します。この素敵な絵本との出会いで、思いやりの心を親子で育むことができました。



ちよつとひといき



『Café & Space Connect (カフェ&スペースコネクト)』 萩谷浩司（取材）

お店のドアを開けると、重厚なカウンターとショーケースに並んだ色とりどりのケーキが目に入ります。洋菓子店とレストランで働いた経験を持つオーナーが作るケーキは、豆乳などを使用し特に健康を意識した手作りの一品。お客様にホツと息ついてほしいという思いから内装には落ち着きある雰囲気ゆつたりとしたテーブルと、お一人様での利用に便利なカウンター席も用意されています。

お店のドアを開けると、重厚なカウンターとショーケースに並んだ色とりどりのケーキが目に入ります。洋菓子店とレストランで働いた経験を持つオーナーが作るケーキは、豆乳などを使用し特に健康を意識した手作りの一品。お客様にホツと息ついてほしいという思いから内装には落ち着きある雰囲気ゆつたりとしたテーブルと、お一人様での利用に便利なカウンター席も用意されています。



住所／常陸太田市稲木町1141-1
電話／0294-87-7888
営業時間／AM10:30～PM8:30 (L.O.8:00)
定休日／第2、4火曜日・毎週水曜日
Webサイト／http://cs-connect.cafe/

ほつとひといき

『ウスバアゲハ』

佐々木 泰弘



ウスバアゲハは半透明の白い翅をもったアゲハチョウです。成虫は五月中旬頃現れる春のチョウです。この蝶は長年、茨城の幻の蝶として有名でした。茨城県では一九四八〜一九五一年に水海道市小貝川河川敷で生息が確認されました。その後一九七六〜一九八七年にそこから八キロメートル下の伊奈村小貝川河川敷で再び確認されました。当時、この蝶は高原に多く見られる蝶の仲間でした。茨城の平地になぜいたのか謎でした。そして一九八七年を最後に茨

城から姿を消してしまつたのです。

その後、三十年近くたった二〇一四年に八溝山で再々発見されました。これは周囲の栃木県や福島県でウスバシロチョウが分布拡大をしていることが分かっていたので予想されたことでした。その後大子町に定着し、二〇一四、二〇一八年には北茨城市で、二〇一六年には常総市でも確認されました。常陸太田市ではまだ確認できていませんが、市の北部では、確認される可能性は高いです。草地の上をゆつくりと飛び、ネギなどの畑の花にも来る可能性があります。常陸太田市の第一号を見つけてみませんか。

新太田点描 21

齐昭公(烈公)の書簡から

水戸徳川家二代藩主光圀公(義公)が隠居所として日常生活を送っていた西山荘は、義公の没後も取り壊されることなく、歴代藩主をはじめ藩士はもちろん領民に至るまで精神的な拠り所として維持・管理されていた。

その後一度だけ野火による類焼で焼失しているが、間もなく再建されて現在に至っている。

さて、今回ここで紹介する書簡は九代藩主齐昭公が側用人に宛てたものである。全文を

先日立原へ申付
置候御西山図
とり儀立原彦人ニテモ
如何と存候間なれハ
人を撰可申候惣而
任太郎へとひ合可然
出来次第早速为上候様
可致候也

三月五日

側用人へ

よんでみよう。

主旨を掻い摘んでみると、「先日(水戸藩士で画人の)立原任太郎(杏所)に西山荘の図を描く様に命じたが、一人では容易ではなからうから、任太郎と相談して助手を付けて早く仕



上がるようにし出来次第に届けるように」と、と云うものである。

ところで今思うに、西山荘は藩領内の聖地として数多の詩・歌に詠まれ、三畳書斎の円窓や老梅木等は格好の画題として描かれても良い筈であるが、明治期以前のもは殆ど確認されていない。

もし、書簡にあるように、杏所が描いた作品が水戸徳川家或いは関係者のところに保管されているのならば是非にでも拝見したいと思うのは私だけでしょうか。

ちなみにこの烈公書簡には後年になって旧水戸藩士で国学者の西宮(西野)宣明の添え状が付けられている。

参考までに下に写真を掲げて置くので古文書に興味・関心のある方はチャンス到来とばかりに解読に挑戦していただきたい。(吉成英文)

